

【特別・嘱託・協同研究員の研究】

【要旨】『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』

試訳 (3)―輪廻には真髓が無いという功德―

渡 邊 温 子

1. はじめに

本試訳は『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号に掲載された試訳に続くものである。今回訳出を試みた『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記 (rJe btsun chen mo mid la ras pa'i rnam thar zab mo)』(以下『甚深伝』)は、ミラレーパ (Mi la ras pa bzad pa'i rdo rje, 1040-1123) の直弟子であるゲンゾンレーパ (Ngan rdzong byang chub rgyal po) を始めとする12人の弟子たちによって書かれた、数あるミラレーパ伝の中でも最初期の作品である。

「『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』試訳 (1)」および「『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』試訳 (2)」で、ミラレーパの前半生に当たる第一部「出自に関して苦行を行じる功德」を訳し終えた。今回は、第二部「三昧に関して実践を行じる功德」の第1章、「輪廻には真髓が無いという功德」の和訳を試みた。

翻訳に際して、中国藏学出版社で出版された活字本を底本として、オックスフォード写本とニューアーク写本と校訂したテキストを用いた。これらのテキスト間には、綴りや単語の違いが多く見られ、この章だけでも286箇所の違いが見られる。『甚深伝』が作られた11世紀には、チベットにまだ活字印刷の技術が導入されていなかったため、伝記を書き写す際に多くの違いが生じたと考えられる。また、『甚深伝』には西チベットの方言が散見され、方言を文字に綴る際にも多くの違いが生じたのであろう。ミラレーパは西チベットのグンタン (gung thang) の出身であったことに加え、彼の伝記をまとめた弟子たちもミラレーパと同じ地方の出身者が主であった。また、ミラレーパは文字で書き残すのではなく、口で歌うことによって自身の体験から生まれた教えを弟子や一般の人々に伝えた。このように口伝が基本であったことも、テキスト内に綴りの違いが多く生まれた

理由であると考えられる。このような背景から、今回は校訂テキストを使用し、『甚深伝』の正確な訳出に務めた。

ミラレーパの伝記と道歌は数多く存在するが、現在一般的に流布しているのは、ツァンニョン・ヘールカ (gTsang smyon he ru ka, 1452-1507) によって編纂された『瑜伽自在者たる聖者ミラレーパの伝記—解脱と一切智者への道説示 (rNal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyan pa'i lam ston)』(以下『道説示』)と『尊者ミラレーパの伝記を廣大にした十万歌 (rJe btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum)』(以下『十万歌』)である。その名前が、ツァン(中央チベット)のニョンパ(狂人)を意味している通り、『道説示』は主に中央チベットの言葉で統一されている。内容はある意味でとても文学的でドラマチックに描かれており、読む者を魅了する。しかし、『甚深伝』には見られない話も多く書き加えられており、『甚深伝』には登場しないミラレーパの婚約者も登場する。ミラレーパ伝は諸言語に翻訳されているが、ツァンニョンの『道説示』が主であるため、『甚深伝』の翻訳は世界的にも初の試みとなる。

今回翻訳を行った箇所は、ミラレーパが師匠のマルパ翻訳師から法を授かり、故郷に戻った時のエピソードである。故郷に戻ったミラレーパは、荒れ果てた家の中で、骨となった母と再会する。ミラレーパは出離の念を確固なものとし、以後仏道修行で生きていく契機となった大切な章である。この章では、ミラレーパの家族、故郷の地名、家や畑の名前が出てくる。その中で、ミラレーパの父親の名前が、「トゥーパ・セワ (thos pa se ba)」となっているが、これは他の伝記には見られない。『甚深伝』の冒頭で「御生誕の地はゲンタン、家系はキュンポ (kyung po)、父親はミラ=シェーラップ・ギャルツェン (she rab rgyal mtshan)」と書かれていたのとも悖る。ちなみに『道説示』では、父親の名はシェーラップ・ギャルツェンに統一されている。また、ミラレーパの一族が所有していた「三角の畑」の話が出てくるが、この表記が、オックスフォード版は 'or mo、ニューアーク版は 'ur mo、活字本は 'or mo と 'ur mo が混在している。一方、『道説示』は 'or ma とあり、この地名は現在でもチベットで用いられている。言葉に関しても意味を確定しかねる箇所が数カ所あるが、引き続き検討して行きたい。